

「イソップ寓話集」

イソップ(著) 山本光雄(訳)
岩波文庫 1942年2月25日刊

イソップは紀元前6世紀にギリシャに実在した寓話作家である。寓話というのは宗教も倫理学も体系だって確立されていない時代の人生訓を集めた、大人の生き方読本とでもいうべきものであり、現存するイソップ寓話は全部で358話ある。

「北風と太陽」、「アリとキリギリス」、「田舎のネズミと都会のネズミ」、「金の斧」、「金の卵」などお馴染みの話が多いが、西洋古典に良く引用される話も多い。例えば、ヘーゲルが『法哲学』で引用し、マルクスも孫引きした「ここがロドスだ、跳べ」という話はイソップの第51話「駄法螺吹き」から来ている。丁度、オリンピックも終わったところなので紹介しておこう。「男らしくないと非難された五種競技者が、ロドスではオリンピック選手たちの誰一人及び得ない程の跳躍をやったと言ったので、そこに居た一人が、もしそれが本当なら、ここをロドスと思って跳んで見給え、と言った」という話である。言葉ではなく事実によって証明すべきだという教訓である。

「白鳥の歌」というシューベルトの歌曲集がある。音楽界では、人生の最後に歌う唄、あるいは最後に聞きたい曲の代名詞として「白鳥の歌」という表現を用いることがあるが、これもイソップの173話と174話の白鳥が死に際に歌うことを題材にした話からきている。

毛利元就が3人の息子達に語った「三本の矢」という話は、実はイソップの第86話の「百姓の息子たち」から来ている。話は、父親が兄弟喧嘩を止めさせるために、一本一本なら折れる薪も、束になると折ることが出来ないという事実を示して、兄弟仲良く団結すべきであるという教訓を導いたものである。日本へのイソップ寓話集の伝来はかなり早く、『天草本伊曾保物語』として1593年に刊行されている。おそらく毛利元就の逸話は創作であると思われるが、2200年前のギリシャの話が如何に時空を超えて戦国時代の日本の武将の話に置き換えられたかを考えてみるだけでも、その普遍性と含蓄の深さがわかるだろう。

評者のお気に入り、哲学者ディオゲネスが禿頭の男に悪口を言われた時に、「わしは悪口なんか言うものか、とんでもない！いや、わしは君の頭の毛を賞賛するよ、彼らは悪い頭のとっぺんにおさらばしたんだからな」と切り返したウイットにある。イソップ寓話集は飽くこと無い人間性の泉であり、百読の価値がある。